大学入学共通テスト試行調査 2018.11　日本史B

全体概要

制限時間　60 分	**配点**　100 点	**大問数**　６大問
出題分野		古代～現代までの通史及び社会経済史・文化史などのテーマ史
難易度　※対現行センター試験		やや難
解答形式		マーク式
主な特徴　※対現行センター試験		全大問で資料・地図などに関する読み取り問題が出題された

全体出題傾向

◆全ての大問で論理的思考や考察力を基にした読み取り問題が出題

現行のセンター試験・新テストにおいて、最低限教科書の内容を習得しておかなければならないことは共通する。現行のセンター試験では、表・グラフ・史料などの読み取り問題は日本史に関する知識や注釈などを読めば簡単に正答できる問題であった。

しかし、新テストでは一部だけを読み取れば正解に辿りつける訳ではなく、与えられた資史料・グラフ・地図と設問文や選択文と丁寧に照らし合わせながら、持っている知識をいかに派生させ応用させていくかが試される。

対策

◆因果関係に着目し思考・考察・読解する総合力が求められる

新テストに向けての学習で大切なのは、歴史を受動的に学ぶのではなく能動的に積極的に学ぶ姿勢を持つことである。そして常に「どうしてこのような事件が起こったのか・なぜこの法令が制定されたのだろうか」という因果関係に意識を向けることである。その上で、日頃の学習から教科書はもちろんのこと、図説・図版集に掲載されている地図・資史料・表・グラフなどの変化や特徴にも注意し多面的な学習を行い、歴史を「点」で捉えるのではなく「線」で結べるようにすることが重要である。

大問別コメント

第１問

開発・災害と人々との関係史というテーマ史で構成されている。問１では、２つの主題を提示し、その内容から何を主題として設定しているかを考察する力が問われる出題であった。問５では、現行のセンター試験では見られない出題形式で、史料・グラフを融合させ、さらにそれらから導き出せる要旨を選択させるという問題で、知識と与えられた条件を結びつける思考力が試された。

第２問

古代官道制度と律令国家との関係性という古代からの出題。問３では、地図の情報と知識を関連づける能力を問う問題であった。提示された地図の内容も、律令国家側の視点ではなく、蝦夷側の視点での提示になっており、斬新である。既存の知識にとらわれることなく、資料を分析する必要がある問題といえる。

第３問

中世における外的影響と社会の変化という中世からの出題。問２では、問題文の問い方がまわりくどく理解しづらい上に、新テストの傾向の中では知識を重視した問題で、中世の外交に関する知識が正しく習得されているかが試されたという点で現行のセンター試験を踏襲していると言える。

第４問

近世社会において作成された文書や絵図に関する近世からの出題。問２（１）では、現行のセンター試験の出題のような、「作者」・「作品」の組み合わせではなく、作者の作品の特徴や時代区分といった部分が問われている。文化史における学習では、一問一答型の暗記ではなく、文化の体系的理解が今後の学習では必要になるだろう。

第５問

近代日本の経済・国際関係に関する近代からの出題。問４では、図版を用いて、日清戦争後の国際関係を「欧米視点」から問う問題である。日清戦争後の日本の台頭を、図版から導く必要があった。問５でも同様に、日清戦争前後の日本とイギリスの関係性を、資料を活用して考察させる問題である。近現代史では、特に世界の中から見た日本を意識させる教育方針が採用されているが、その方針を象徴する代表的な問題である。近年では、図版では新入試を意識して内容を改訂しているものも存在するので、ただ見るだけでなく、時代との関連性を意識したい。

第６問

近現代史における時代の転換点に関する近現代からの出題。本大問は全体として、現行のセンター試験に比べると、戦後史の比重が高まっていることがあげられる。出題傾向としても、問１・問４・問５・問６のように、現代社会との関連をふまえている点が特徴である。また、問７では正解が１つではない設問が初登場したこともあり、今後の新テストにおいて、この種の問題が増加する可能性は否めない。